

大学生協九州事業連合PC講座 統一カリキュラムの評価・分析

北村 士朗*1*6・板倉 隆夫*2*7・熊澤 典良*3*7・上村 隆一*4・小林 陸生*5・深見 隆久*6・
田村 達哉*7・村中 誓司*5・樋口 直樹*5・松浦 和規*5・三重 浩通*5

Email: kitamura.shirou@nifty.com

- *1: 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻
- *2: 鹿児島大学水産学部
- *3: 鹿児島大学大学院理工学研究科
- *4: グローバルコミュニケーションクラウドサービス株式会社
- *5: 大学生協九州事業連合
- *6: 熊本大学生生活協同組合
- *7: 鹿児島大学生生活協同組合

◎Key Words PC講座, 情報教育, インストラクショナルデザイン

1. はじめに

筆者らは「大学生協のPC講座は今のままでよいのか?組合員のこれからの情報生活をサポートする生協事業はPCの販売や講座だけでよいのか?」という問題意識のもと、大学生協九州事業連合におけるPC講座の改善とビジネスモデル自体の刷新、スマートフォンやタブレットへの対応等の検討を目的に、大学生協九州事業連合とCIEC九州支部のジョイントプロジェクトとして「情報生活サポート研究会」を立ち上げ、調査・検討等を行っている。

その一環として、九州事業連合内で2015年度のPC講座に向けたPC講座カリキュラムの共通化を実施したところ、それまで問題とされていたキャンセル率・出席率については速報値ながら改善が確認された上、生産性向上やノウハウ共有、会員生協(以下、各会員生協を「単協」と呼ぶ)の講座スタッフ(学生スタッフ)やPC講座担当職員(以下「担当職員」と略)の学びの機会が創出される事例が見られた。本稿執筆時点で2015年度PC講座は実施中であるため、本稿ではカリキュラム制作途上で見られた事例等を中心に中間報告する。

なお、本取り組みは当初「(カリキュラムの)統一化」と呼ばれていたが、本カリキュラムを用いない単協もある等の理由から「共通化」と名称変更されたため、本稿本文でも「共通化」と呼ぶ。また、本稿での「カリキュラム」には本来のカリキュラムに加え、配布物や提示するスライド等も含まれる。

2. PC講座カリキュラム共通化とは

2.1 背景

大学生協九州事業連合のPC講座においては長年にわたりカリキュラム制作が各単協独自に行われてきたが、同じような作業を各単協が行う非効率性、費やされる時間の膨大さに伴うカリキュラム制作の自己目的化、カリキュラムの質の各担当講座スタッフ能力への過度な依存といった問題が関係者間で認識されるようになった。

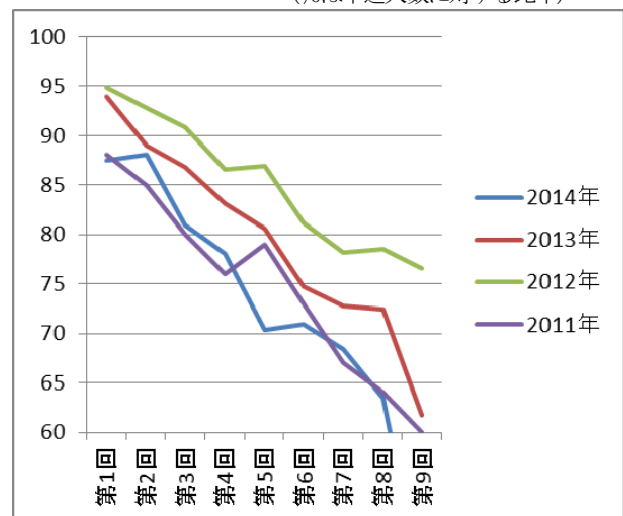
一方、開催されたPC講座の多くは受講キャンセル率(表1)・出席率(図1)がおもわしくない状況にあり、各単協の「担当職員」や講座スタッフの努力にもかかわらず改善が見られなかったことから、抜本的な対策が求められた。

そこで打ち出されたのがカリキュラムの共通化であり、2013年から取り組みが始まった。2014年は作業部会やPC講座スタッフ講習会、担当職員会議といった対面の行事の他、無料のグループウェアであるサイボウズLiveを用い情報共有や意見交換をしながら、各単協で作業を進めていった。

表1 過去4年間の申込人数とキャンセル数
(九州事業連合合計)

	2014年	2013年	2012年	2011年
申込人数	3014名	3180人	2656人	2635人
キャンセル (開講前)	186人 (6.2%)	92人 (2.9%)	119人 (4.5%)	133人 (5.1%)
キャンセル (開講後)	122人 (4.1%)	132人 (4.2%)	135人 (5.1%)	103人 (3.9%)

(%は申込人数に対する比率)



(多くの単協で実施されていた第9回までの比較)

図1 過去4年間の出席率推移 (九州事業連合合計)

2.2 目的と期待された効果

カリキュラムの共通化は、カリキュラムや教材類を参加単協間で分担制作し、相互点検・コメントしながらブラッシュアップすることで講座の質を高め、キャンセル率や出席率を改善しようとする試みである。

共通化への参加は九州事業連合内の各単協の任意であり、2015年に向けては所属する17単協中6単協の参加が得られた。

当初想定されていた共通化の効果は2点であった

第1にカリキュラム作成や開講準備の効率化である。

前述の通り、共通化以前は、各単協がそれぞれカリキュラムを策定し、教材やスライドを作成していた。取り上げる内容自体はどの単協においてもパソコンの基本操作、メールの送受信、オフィスソフトの操作、レポートの書き方が中心であり、各大学のシステムの利用方法など若干の独自な部分を除けば大きな差違は無かった。そのような状況下で各単協がそれぞれ全ての回のカリキュラムや教材の制作を膨大な時間を掛けて行うのは明らかに非効率であり、内容の改善や講師スキルの向上に割くべき時間が圧迫され、質の改善の阻害要素になっていることが十分に推測された。

そのため、カリキュラムの策定や教材・スライド作成といった作業を共通化に参加する単協間で分担し効率化をはかることで、開講準備が充実し、講座の質が向上すること期待された。

第2にノウハウ等の共有である。

カリキュラム共通化以前にもPC講座に関する担当職員会議や講座スタッフ研修会は行われており、各単協での取り組みについての情報交換は行われていた。

しかし、カリキュラムが単協別になっていたため横比較がしにくく、議論や検討がかみ合わない、「そもそもカリキュラムが違うから」という点で収束してしまい議論が深まらない、といったことが散見され、会議や研修会でのノウハウ共有やその後の活用がされにくかった。

このような状況に対し、カリキュラムを共通化し、横比較や議論をしやすくすることで、各校のノウハウ、特に出席率・キャンセル率の良い会員のそれが明確になり、それらが反映された共通カリキュラムをそのまま各単協が用いることで、質の底上げが期待された。

3. 評価

3.1 キャンセル率・出席率

共通化の主たる目的であったキャンセル率と出席率については、表2の通り本稿執筆時点（2015年6月15日現在）の速報値で改善が見られた。

表2：キャンセル率と出席率の比較

	2015年	2014年	差
キャンセル率 (開講前)	4.1%	6.2%	▲2.0
キャンセル率 (第3回まで)	8.2%	10.4%	▲2.2
出席率	83.3%	75.8%	7.5

(2015年6月15日現在)

3.2 生産性向上

当初期待された効果のひとつである生産性向上についての本格的な分析は本年度のPC講座閉講後に行う予定である。これは、ヒアリングの結果、共通化以前のカリキュラム制作は講座開講（4月）以降も講座運営と併行して行われていたこと、共通カリキュラム化によって業務の進め方やタイミングが大きく変わったことが判明し、準備開始～閉講までのトータルな比較が必要だということが判明したためである。ただし、生産性向上に繋がったであろう事象や事例が見受けられた。

まず、開講までの工程管理が計画的になり、厳密に守られるようになった。これは共通化に伴い、各単協での作業は進度をそろえる必要があり、研修会や提出期限などの他単協と関連するマイルストーンも設定されたためである。このことは計画的な作業につながったと考えられる。

一方、講座スタッフが開講までのスケジュールがタイトになったと感じているケースもあった。共通化以前は10月～3月頃の間各単協のペースでカリキュラム制作と開講準備を併行して行っていたのに対し、共通化においては、10～12月は各単協が分担分のカリキュラムを制作し、それらが出そろった12月から各校で使うためのカスタマイズや制作担当回以外の模擬授業などの開講準備をはじめることとなり、結果として各単協の開講準備期間が12～3月の短期間になりスケジュールがかえってタイトになったように感じたことであった。

また、2013年から取り組んでいる単協から2年目ならではの生産性向上事例の報告があった。

同単協では1年目（2013年）はどこまでカスタマイズするかあいまいだった上、独自カリキュラムのイメージを払拭できず、結局、全体にカスタマイズを施してしまっていたのに対し、2年目（2014年）はカリキュラムを①「共通カリキュラムをそのまま使う部分」②「大学ごとにカスタマイズする部分」に分け、①はそのまま変更を加えることなく使用した、というものである。その結果、1年目は6月になっても、講座を進めながらカリキュラムを制作している状態だったのに対し、2年目は4月の開講以前に準備が整った。また、完成時期が早まった分、模擬授業に時間をかけられ、練習をたくさん積めたため講師の質が上がった。

この他にも、副次的な生産性向上の事例としてテキスト印刷を省力化できた単協があった。共通化以前は各回の配布物を講座スタッフが都度印刷していたのに

対し、共通化に伴い印刷所に印刷を発注できるようになり、講座スタッフの手間が大きく省けた。今後、共有化参加単協で共同印刷することにより、印刷費・人件費共にさらなるコストダウンが見込まれることが示唆された。

3.3 ノウハウの共有

共有されたノウハウとしては、カリキュラムで取り上げるスキルの選択方法、スライドのデザインなどカリキュラム制作に直接関わるものにとどまらず、講師としての講義や説明のしかた、受講生募集の宣伝物や話法、グループワークの進め方、欠席者対策、受講後のアンケート調査の手法等、講座の進め方や募集に関するものまで多岐に及んだ。これらはカリキュラムのみならず講座全体の品質向上に寄与していると考えられる。

ノウハウ共有に向けたプロセスで特筆すべきはカリキュラムへの相互点検とコメントである。いったん出来上がった仮のカリキュラムに対して当該部分の担当ではない単協が内容をチェックし、誤りの訂正要求やより良くするための改善提案などが研修会やサイボウズLive上で行われ、それら訂正や改善の是非や方向等についての議論も活性化し、その内容も実務的・実質的なものとなった。

議論の活性化には3つの要素が影響していると考えられる。

第一に、共通カリキュラム制作に向けたツールが議論のプラットフォームになったという点である。

共通化においては、各回の学習目標・内容、事前準備等を可視化する「コンセプトシート」、スライドのテンプレートなどのツールも共通化されたため、チェックや検討が容易になるとともに、議論のポイントも明確にしやすくなった。

第二に、共通化によって、比較が容易になり、課題や問題が明確化しやすくなった点があげられる。

各単協は同じ共通カリキュラムを用いて講師としての説明や講座の進行などを検討していくが、当然、単協ごとに出来上がり姿は異なる。研修会での模擬授業でもその相違点は認識されていたが、以前であればその相違の原因がカリキュラムの違いか、それ以外の要因かを明確にしにくかった。これに対し共通化によってカリキュラムが同一となったことから横比較は容易となり、相違点についての議論等がしやすくなった。これらによって、カリキュラムに関するノウハウだけでなく、講座現場における講義やグループワークの進め方などカリキュラム周辺のノウハウの交換・共有も円滑になり、より活発に行われるようになった。

第三に、各単協が共通カリキュラムを自分たちが実際に使う前提で見えるようになった点である。

共有化以前は他単協のカリキュラムはあくまで他単協のものであったが、共通カリキュラムは「自分たちが使えるか、使いやすいか」という視点で詳細な点までチェックされ、改善に向けた議論においても具体的な改善策が示される建設的批判が活発になされた。

これらの取り組みを通じ、参加単協全体でひとつの講座をつくりあげることで、当初の目論見であった「好成績を挙げている会員に合わせた全体の底上げ」

に寄与できたものとする。

なお、ノウハウ共有の本来の成果である教育上の効果・効率・魅力については、2015年度のPC講座閉講後、アンケートやテストの結果をもって評価・分析する予定である。

3.4 学びの機会と場

当初期待されていなかった効果として、講座スタッフや担当職員の学びの機会や場となったことが挙げられる。

共通化以前は、講座スタッフは講座を運営すること、つまり受講生と関わること、受講生を満足させること、結果としての出席率向上にこだわることで成長する、と考えられていた。

しかし共通化を進める中で他単協との交流の場が増え、その中でPC講座について多面的に考え、議論することを通じ講座スタッフのみならず担当職員も、スキルアップするとともに、モチベーションを上げていった。

まず、取り組みの当初において、「PC講座は何を目指すか」を担当職員・講座スタッフがあらためて議論した。このことによって、生協が事業としてPC講座に取り組む意義、PC講座が受講者に提供すべき価値、自分たちの果たすべき役割といったPC講座の根幹について自分たちなりに考え、理解し、共有することができた。これらは共通カリキュラム関係者間の共通言語となり、検討や議論の円滑化や深化に寄与するとともに、ある事業に関して根幹から考えてみるといった経営的な視点を獲得するための良い機会となった。

また、講座スタッフだけでなく、担当職員にとっても意識・スキルを向上する機会となった。

共通化以前、担当職員はカリキュラムの検討や制作を講座スタッフに一任し、内容等に関わらないことが少なくなかった。

これに対し、共通カリキュラムの具体化が進み始めた初期段階から、他単協の担当者や会議で議論し、共通カリキュラム制作段階においては、講座スタッフが提案してきた内容を細かく分析し、担当者会議で内容の配分や取舍選択などについて協議することが求められた。また、内容が定まり各単協でカリキュラム制作や開講準備をする際、講座スタッフからアドバイスやコメントを求められることも多くなった。

これらに際して、担当職員の多くはパソコンに関する知識やスキルの不足を自覚するようになった。

そのため、PC講座のレベル設定に用いられたP検3級を取得したり、講座スタッフと共にタイピング練習に取り組んだりする姿が見られるようになった。

さらに、講座スタッフにとってはモチベーションアップにもつながったと考えられる。他大学のスタッフと定期的に交流することにより「他大学に負けたくない」「恥ずかしい思いをしたくない」「研修会で良いコメントをして称賛されたい」といった競争

意識が様々な発言の中で見受けられた。そして、担当分に納期や内容の問題があれば、自分たちが困るだけでなく、他単協に迷惑をかけてしまうことが、責任感の強化につながった様子も見受けられた。

4. 今後の課題

4.1 評価活動

本年度の講座完了後、以下についてデータ収集と評価・分析を行う予定である。

- ① 受講者の満足度
 - ・受講者アンケートおよび出席率
- ② 学習目標の達成度
 - ・最終テスト（P検3級相当）の合格率
- ③ PC講座の有用性
 - ・追跡調査（「大学生生活まるとアンケート」の活用）
- ④ 経営貢献度
 - ・損益計算および各種経営指標（スタッフの作業時間等）
- ⑤ 講座スタッフ・担当職員の取り組み状況等
 - ・アンケートやインタビューを実施し、取り組みの実態等を調査

4.2 カリキュラム共通化の取り組み

取り組み自体の今後の課題としては、現時点では以下のものが挙げられる。

- ① 開講後の継続的交流

実際に共通カリキュラムを用いた結果や問題点などについての情報・意見交換ができるよう、交流が継続することが望ましい。
- ② 次年度に向けた質と生産性の向上

今回制作された共通カリキュラムを用いる前提で、次年度に向けたカリキュラムの質や制作の生産性をどのように高めていくか、作業の分担方法も含めプロセス等の検討が必要である。
- ③ 共通カリキュラム下での各単協講座の質向上

各単協において講座の質を上げるためのカスタマイズやカリキュラム使用法に関する検討が必要となる。

5. おわりに

本稿では九州事業連合におけるPC講座カリキュラム共通化の評価について中間報告した。速報値ながらキャンセル率と出席率が改善され、当初効果として見込まれた生産性向上やノウハウ共有について、いくつかの事例・事象が見受けられた。また、共通カリキュラムの検討・制作プロセス自体が講座スタッフや担当職員にとって良い学びの場となったことが示唆された。

キャンセル率や出席率が改善された要因については、各単協で実施している受講者アンケートおよび各単協での振り返りの結果を待って分析する予定だが、これまでに述べた事象等から以下のものが推測される。

- ① 共通化により作業が分散され、各回の制作にそれまでより時間をかけられるようになったうえ、相

- 互確認・コメントが行われたことで、内容の厳選、コース構成や内容の分かりやすさの向上、誤りの減少など、カリキュラムそのものの質が向上した。
- ② 共通カリキュラムを検討する過程で講座スタッフPC講座全体への理解が深まるとともに、模擬授業等の回数が増えたことが自信につながり、勧誘時の説明力が向上し、より訴求できるようになった。
- ③ 共通カリキュラム制作過程における議論やノウハウ共有を通じ、講師のインストラクション、TA (Teaching Assistant) やGA (Group Assistant) のサポートの質が向上したため、受講者の満足度が上がった。
- ④ 共通カリキュラム制作過程において議論されたキャンセルや欠席を減らすための策が実施され奏功した。
- ⑤ 他単協と定期的に交流することにより講座スタッフに競争意識が芽生え、頑張りや創意工夫につながった。
- ⑥ 共有カリキュラム制作やそれに伴う交流の中で、関係者が効力感や成長感を得、モチベーションが高まった。

今後は4.1で述べた評価を行い、上記の検証をするとともに、共通カリキュラム化のメリット・デメリットや、より良いものにしていくためのノウハウの抽出、プロセスの検討等を行っていくとともに、PC講座の事業としての今後の姿を検討していきたい。

参考文献

- (1) 北村他：“大学生協PC講習会の改善および『情報生活サポート』事業構想の提案”，2014PCカンファレンス全国大会（札幌学院大学）発表論文集，pp.338-341（2014）。